

紹介

ロデリッヒ・フォン・ウンガルン

シュテルンベルヒ稿「佛蘭西の民

族生物學的衰退」

Roderich von Ungarn=Sternberg: Der volks-

biologische Verfall in Frankreich, Archiv

für Bevölkerungswissenschaft und Bevölkerungs-

politik, X Jahrgang⁵, Heft 1940

一

今次大戰に於ける佛蘭西の敗北の原因を、その強度の出生減退傾向のうち求めやうとする論者は、この國においても少くない。否少くないばかりでない。この國最近の出生減退傾向への警告として、人口問題を語るものによつて、殆んどつねに引合ひに出されるのは、このこと、即ち佛蘭西の敗北とその強度の出生減退傾向との關聯である。最近の「人口學、人口政策アルヒーフ」のなかで、フォン・ウンガルン＝シュテルンベルヒも、「佛蘭西の民族生物學的衰退」と題して、この問題を取扱つてゐる。彼も

亦、「一九四〇年夏のフランスの軍事的崩壞の原因は何よりも先づ生物學的のものである」と斷じ、崩壞を導いた原因は數多くあるけれど、それらは何れも副次的意義を有するにすぎず、結局、戰敗の原因は最近百年間のフランスにおける人口自然増加の劣弱に歸せしめられねばならないとする。そして、最近百年間のフランス人口動態を英國及びドイツと比較しつつ、その劣弱性を明かにし、最後に、「世界觀說」の立場から、フランスにおける出生減退の原因に説き及んでゐるのであるが、ここでも、フランスの歴史的现实から、精神史的な解明を與へやうとしてゐることが注目し値ひする。(註一)以下簡單に要旨を紹介する。

(註一) シュテルンベルヒの出生減退の原因についての研究の一般的な方法論については人口問題研究、一卷六號に紹介した。拙稿「フォン・ウンガルン＝シュテルンベルヒ著出生減退の原因に就ての研究」參照

二

先づフランスの民族生物學的衰退の過程が、統計的に明かにされねばならないが、そのために、シュテルンベルヒは、一九世紀におけるその政治的競争國である英國及び獨逸との對比において之を明かならしめるのである。殆んど凡ての西歐文化國は、一九世紀のうちに未曾有の人口増加を経験した。これは高率の出生率と遞減する死亡率の合成果である。併しフランスは殆んど、このやうな人口増加を経験してゐない。英獨と比較するとき、出産への意志の弛緩の顯著なことがこゝに見られるのである。これを明かにするのが次表の數字である。

フランスの出生率は繼續的に低下してゐるが英國の出生率は全く異つた變動を示してゐる。先づ注意すべきは、英國の出生率は、一八四一—一八五〇、一八五一—一八六〇の十年平均が、一八六一—一八七〇、一八七一—

年	平均	出生率 (生産)	死亡率	自然増加 率
1841—50	フランス	27.4	23.3	4.1
	ドイツ	—	—	—
	イングランド・ウェイルス	32.6	22.4	10.2
1851—60	フランス	26.3	23.0	2.4
	ドイツ	35.3	26.3	9.0
	イングランド・ウェイルス	34.1	22.2	11.9
1861—70	フランス	26.3	23.6	2.7
	ドイツ	37.2	26.8	10.3
	イングランド・ウェイルス	35.2	22.5	12.7
1871—80	フランス	25.4	23.7	1.7
	ドイツ	39.1	27.2	11.9
	イングランド・ウェイルス	35.4	21.4	14.0
1881—90	フランス	20.1	19.3	0.8
	ドイツ	32.9	18.6	14.3
	イングランド・ウェイルス	27.2	15.4	11.8
1936	フランス	15.0	15.3	—
	ドイツ	19.0	11.8	7.2
	イングランド・ウェイルス	14.8	12.1	2.7
1937	フランス	14.7	15.0	—
	ドイツ	18.8	11.7	7.1
	イングランド・ウェイルス	14.9	12.4	2.5
1938	フランス	14.6	15.4	—
	ドイツ	18.8	11.9	7.0
	イングランド・ウェイルス	15.1	11.6	3.5

一八八〇の十年平均に比してより低率であることである。英國においても、ドイツにおいても、出生率の最高は七〇年代に記録され、その低下は八〇年代にあらはれたのであるが、フランスは既に早くから出生減退の一途を辿りつゝあつたのである。最近にいたり、英佛の出生率はいへん接近してゐる。しかし死亡率は、フランスにおいては比較的變動少きに比して、英獨においては継続的な低下を示してゐるのである。このような出生、死亡の變動により、フランスの自然増加は、英獨に比してはるかに低率を示

し、大戦前の十年間には〇・八まで低下し、一九三五年から一九三八年までの間は、死亡率の出生率凌駕が記録されたのである。(次表)かうしてフランスは總計七六、四一三人を、一九三五—三八の間に失つた。

年	生産		死亡		自然増加	
	絶対数	率	絶対数	率	絶対数	率
一九三八	六三、三三六	一四六	六六、八八九	一五四	(-) 三、五五三	(-) 〇・八
一九三七	六六、八六三	一四七	六八、〇三三	一五〇	(-) 一、一七〇	(-) 〇・三
一九三六	六四、〇五九	一五〇	六四、二一五	一四三	(-) 二、〇八〇	(-) 〇・三
一九三五	六四、〇五七	一五三	六八、三七九	一五七	(-) 二、七二二	(-) 〇・四
一九三四	六七、三三三	一六一	六四、五五五	一五一	(+) 二、七七八	(+) 〇・四

次に絶対人口数と人口密度の英獨佛三國の比較が、上述の傾向を裏付けるために試みられる。一八四一年フランス人口は三四・二百万を、ドイツ人口は三二、九八七、〇〇〇を算した。(一八七一年の領土において)。かく百年前においては、フランスは一・三百万だけドイツよりも多い人口数を有してゐたのであつた。しかるに、一九一〇年、ドイツ人口の六四・六百万なるに比してフランスは三九・二百万を示すにすぎず、即ち、七〇年の経過のうち逆にドイツに二五・四百万だけ追越されてゐる。

人口密度の發展は次表の如くである。

年	フランス	ドイツ	オーストリアを除く
一九二〇	五六五	四九二	—
一八六〇	六七八	七〇四	—
一八八〇	七二二	八三七	—
一九〇〇	七三六	一〇四三	—
一九一〇	七三六	一二三六	—
一九三六	七六一	一四〇三	—

即ち一八二〇年ドイツより大であつたフランス人口密度は、一八六〇年すでにドイツに追ひ越され、現在は殆んどドイツのみにすぎない。フランスの人口分布状態についてとくに注目すべきは、自然的條件に恵まれるところ

の少ない縣、たとへばマルス縣シアンパーニユの水に乏しい地方、ロアル縣シェー縣ソロンヌの嘗て鹹湖にとりまかれてゐた地方、沼澤地方等が人口密度少きことはあやしむにたりないのであるが、この他、農業にとくに適し、數十年前に充分稠密な人口を有してゐたに不拘、現在非常に低い人口密度を示す縣が少なくないといふ事實である。即ちガロンヌ河の支流、ドルドーヌ河とロー河の間の地方、南部及び南西部地方である。ここでは人口密度は一九人にまで低下した。(平均は七六・一人である) フランスに於ては、一八九一年から一九〇六年までの一五年間に、九〇九、〇〇〇だけ人口増加を示したのであるが、ドイツに於ては、一九〇六年一年だけで九一〇、二七五の自然増加をみせてゐるのである。フランスではかくして戦前すでに、一八九〇、九一、九二、九五、一九〇〇、一九〇七、一九一一年の各年には死亡の出生に對する超過が記録されてゐる。人口數の絶對的減少は、外國移住者によつて漸く免れたのであつた。即ちたとへば一八九一年は一八九〇年に比して、僅か一年間のうちに三八、三八〇、〇〇〇から三八、三五〇、〇〇〇へと絶對的減少を示してゐるのである。以上の叙述から、シュテルンベルヒは、「英獨に對するフランスの全く異つた人口發展が、政治及び經濟の領域上に及ぼした廣汎な影響が理解されるであらう」といつてゐる。

世界戦争は、フランスの勝利に歸したけれど、その生産能力ある人口の減少はますます大となり、その人口は、すでにフランスの強國として、世界第二の植民地國としての地位を危くするものとなつた。即ち一七百萬の人口を有する、アルサス、ローレンスを併合したにも不拘、一九一一年八七縣における三九、六〇四、九二二から、一九二一年には九〇縣における三九、二〇九、七六六に減少したのである。舊八七縣だけをとるなら一九二

一年は一九一一年に比して實に二百萬の人口減少となる。一九二六年のセッサスがはじめて、九〇縣において四〇・七百萬を示し、戦前に比しての増加を記録しえたのであつた。この間の事情を考慮するときは、戦後のフランスは、人口學上からみると、その人口動態の中に一の轉機が生じないかぎり望なきものであつたことが理解されるであらう。しかも、フランス國民は、このやうな轉機のために必要な精神的な條件をもち來ることが出來なかつたのであつた。人口はますます減退の傾向をとつた。出生率をたかめるためにとられた凡ての經濟的手段は完全に無力であつた。一九三九年七月二十九日の家族法典(註三)による最後の廣汎にわたる法律を以てする出生減退阻止への努力も、ついに、効果をあらはすことなく一九三九—四〇年の戦争状態に入り込んだのであつた。

註三人口問題研究一卷一號、北岡壽逸氏「佛國家族法典」參照

「フランスが現在の戦争に参加したことは、フランスにとつてはひどい冒險であつた」とシュテルンベルヒは述べてゐる。後に述べられるやうに、フランスはたんに人口の量に關してばかりでなく、その國民の精神的態度世界觀においてすでにこのやうな冒險に耐ええなかつたのである。先づ、人口の量に關して考へても、國民の數がこれ以上減少するときは、フランスの國防軍事能力がひどく阻害されねばならないことは豫め明かであつた。即ち、フランスに於ては、一九三五年から一九三八年までの間に、その人口は七六、一一三だけ減少してゐるのであるが、ドイツ及びイタリアにおいては、この期間に自然増加數夫々一、九七八、二二三及び一、五七七、二八九を示してゐるのである。一五一六〇歳までの生産年齢階級人口を比較するなら、次の如くである。

フランス(一九三二) 二七、八六六、〇〇〇人

ドイツ(一九三三) 五一、七四三、〇〇〇人
イタリア(一九三六) 二六、六三〇、〇〇〇人

この比較では、フランスはイタリアの上にあるが、これは専らフランスにおいて壯年の人口層が相対的に大きいことに起因してゐるのであつて、二、三年後、現在一五歳以下の出生減退によつて人口数少い年齢層が、生産年齢に入るとき、このいまの優越性は忽ち失はれるであらう。

現在のところ、今次の戦争において、フランスの人口喪失がどの位の程度に達したかを知ることが出来ないが、死亡数が出生数を超過することだけは確實である。たゞに再生産能力ある男子の戦死ばかりでなく、市民の間の死亡率の増大と、出生の著しい減退とは、一九三九年、一九四〇年の人口動態のなかに大きいマイナスを示してゐる。更にまた、この出生減退の影響は、現在の出生児が再生産年齢に入るべき、二五年乃至三〇年の將來に、人口増加のマイナスを惹起せしめるであらう。こゝに注目すべきは、前大戦當時、一九一五年乃至一九九年の大戦による減退を示した出生者が、丁度一九四〇年に再生産年齢階級に入り來るといふことであり、更に北フランス人口の大多數の逃亡と、現在の戦争状態の一般的精神的影響が、出生減退の傾向を鋭くするであらう。「此等凡ての現象を基礎として、次の主張がなされるであらう。フランスは軍事的崩壊とそれにもなふ民族生物學的衰退から完全に救済されることは出来ない。おそらく將來フランス國家がどのやうな形態をとらうとも、この國は強國としての存在をやめるであらう」とシュテルンベルヒは斷ずるのである。

三

フランスの民族的構造は極めて統一である。國內少數民族は、フランス全人口の約十分の一にすぎず、ドイツ系を除くなら全人口の一八分の一

にすぎない。このやうに相對的に統一的な民族的構造は、統一國家として自己を主張すべき場合、困難に遭遇するところが少いにも不拘、フランスは強國として自己を主張することが出来なかつたのである。何故であるか。こゝでシュテルンベルヒは、さきにも述べた如くに、フランスの軍事的敗北の原因を何よりも、その人口數の相對的過小の中に求めやうとする。曰く、「國が強國として存立するためには、他の列強に匹敵するだけの人口數を支配しえなければならぬ。そしてフランスが、西歐の最高強國だつたとき、即ち一九世紀のはじめ、ナポレオン時代に、その富強の頂點に達してゐたといふことは、たしかに偶然ではない。」シュテルンベルヒは、人口多き國の人口少き國に對する優越性を、たんに、軍事的なる點においてのみ認めるばかりではなく文化的な點においても、認めやうとするのである。シュテルンベルヒの説くところによれば、はげしい、若干の人口壓迫を惹起せしめるやうな人口増加は、そこから生ずる失業、社會的緊張等の

諸の困難と同時に積極的に、個人々々に對して、凡ての活動領域の上で最高の業績を強制するとともに、平均以上の優れた素質をもつ人間をより多くつくり出すからである。即ち「凡ての西歐文化國民にとつて環境は殆んど同じであるが、たかい出生率をもつ國民はただ物質的な點で強大であるばかりでなく、同時に文化的に價値ある業績において、人口増加よりもより多い寄與をなしてゐる」のである。そしてシュテルンベルヒは人口増加の少いスエーデンをもつてこのことの證左としようとする。スエーデンは、模範的な國民學校制度を有するにも不拘、すでに永い間、西歐の大國民のやうに多くの才能あり一般的に卓抜した人物を生まなかつた。それは、ただ人口増加の少かりしによるのである。そしてフランスも、大戦後は、その人口減退のために、ドイツに對抗しうるだけの才能を生まなかつた

といつてゐる。

それでは、上述の如き結果を齎らす出生減退傾向はフランスにおいて、何故あのやうに鋭く露呈されたのであるか、何故フランス國民は最も早くから、そして最も永きにわたつて産兒制限をつけたのであるか、かく自ら問ひ、シュテルンベルヒは次のやうに答へるのであるがこゝに「出生減退の原因の理解は、文化史的なる分析をまつてはじめて獲得される」といふ、彼の歴史主義的立場が明瞭に露呈されるのである。答は斯うだ。「自由主義、個人主義、啓蒙哲學、理性崇拜のイデオロギーは、フランスに始まつたのではないけれど、一七八九年の革命のなかで最もつよく宣傳され、最も效果的に大衆の中に滲透したのである。典型的なフランス人といふのは、小市民的利己的な野心家の原型である。彼は、安息を欲し、彼の眼中には、子供は心配と苦勞の源泉であり、彼は出来るだけそのやうな苦勞から免れやうとする。彼の理想は出来るだけ靜かな、たしかな理性的な生活である。このやうな人間タイプが、決して戦士でも英雄でもなく、彼の周圍に英雄的な精神を喪失せしめることは明かである。——一九四〇年のフランスの敗退の原因を判断するためには以上の考慮が必要である」。

更にシュテルンベルヒは、問をつゞけるのである。「一體フランス人は、上述のやうなイデオロギーに對する大きい受容力をどこから得たのであるか。一體フランス人は、そのやうな素質を本來的にもつてゐるのであるか。」この後の疑問は無條件で否定される。フランスは、一二世紀及び一三世紀、再に一六、一七、一八世紀に輝かしい政治史をもつてゐる。そしてナポレオン時代をも。だから、シュテルンベルヒは、小市民的精神の形成を、かつての *epoque glorieuse* の日に榮えた英雄的精神、ニーチェの言葉をかりるなら *hochgearteteter und abseitsliegender Geist* の擔ひ手が、世紀の

経過のうち大部分死に絶えてしまつたことに起因せしめるのである。フランスにおいても、一般的な民主主義化に伴つて、幸福を求め、努力をいとふ小市民的人間タイプによつて驅逐されるまでは、疑ひなくこのやうな英雄的精神が活潑に働いてゐたのである。ユグノーの放逐と根絶、宗教戦争とフランス革命による貴族の大量の虐殺、このやうな、*Rundschüdel* による *Landschüdel* の驅逐、フランスの北方性脱化によつて、英雄的精神は小市民精神におきかへられた。これが一九四〇年の崩壞の基本原因となつたのである。

最後にシュテルンベルヒは、フランスの民族生物學的再生の期待に對して懷疑的である旨を述べてゐる。五〇年以來政府によつてとられた、國民に出生減退の危険を認識せしめやうとした凡ての努力が失敗し、所謂理性的な子供數の制限への宣傳が、左翼によつて繼續的に行はれて來たといふ事實が、彼を懷疑的たらしめるのである。生物學的再生の第一の前提條件は、彼にしたがうときは、大革命の傳統からの脱却といふ意味での世界觀、人生觀のラディカルな變革であるが、大革命の傳統の繼承者、フランス・ブルジョア、知識階級の指導者の政治的破産はもはや明瞭となつてゐる。だから、このやうな變革は決して不可能ではないが、このやうな世界觀の轉換が效果的に行はれるためには永い年月を必要とする。このことは、偉大な創造力をもつた卓越した天才の仕事によつて獲得されるであらうが、フランスがこのやうな人物を生み出すか否かは分らないとシュテルンベルヒはいつてゐる。

(雪山慶正)